様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１８２７０

研究課題名（和文）現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究

研究課題名（英文）A Study of Social Mechanisms of Long-Term Conflict Intervention in Contemporary Iran

研究代表者
黒田　賢治（Kuroda, Kenji）

国立民族学博物館・現代中東地域研究国立民族学博物館拠点・特任助教

研究者番号：００７２５１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：2010年代以降、シリアなどの中東諸国では、超大国だけでなく、周辺諸国による紛争介入が行われながら、長期的な紛争状態が続き、難民問題を含め超地域的な影響が及んできた。本研究では、紛争介入を行う周辺国を代表するイランについて、一定の民主的政治制度が行われてきた同国の内政上の構造と宗教的言説をイデオロギー化させてきたことを踏まえて、「殉教者（シャヒード）」をめぐる言説構造に着目しながら、社会的に紛争介入を可能／紛争介入への批判を妨げる社会的メカニズムの解明を試みた。その結果、「殉教者」概念の操作を通じて異なる紛争の当事者性が国家の言説に一元化されてきたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は中東地域研究として、中東地域の実態について明らかにしてきた学術的意義に加え、紛争という中東地域で発生してきたマクロな現象が継続的に発生するメカニズムについて、日常のミクロな人の営みに基づいて実証的に検証するという方法論的な意義がある。こうした方法論的な意義は、同時に平和あるいは紛争に対するミクロな個人の主体性を明らかにすることでもあり、個々人の平和に対する日常的な貢献の可能性と責任を示したものであるという社会的な意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：Since the "Arab Uprising," Syria and other countries in the Middle East have been in a long-term state of conflict, with conflict intervention by neighboring countries as well as superpowers such as the United States and Russia. With regard to Iran, which represents a neighboring country that intervenes in conflicts as well as conducted certain democratic procedure in the domestic politics, this study has attempted to elucidate the social mechanisms that enable conflict intervention/prevent criticism of conflict intervention. In this moment, given the heavy use of religious concepts as the ideological cornerstone of the state, this study focused on the discourse structure surrounding "martyr (shahid)". Through empirical research methods including fieldwork, this study revealed that the partyhood of different conflicts has been centralized in the state discourse through the manipulation of the "martyr" concept.

研究分野：地域研究

キーワード：紛争の長期化のメカニズム　中東　イラン　殉教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2010 年以降のいわゆる「アラブの春」に揺れた中東諸国では、長期的に存続してきた権威主義体制の支配構造に変動が生じた。支配構造への変動にもかかわらず存続した国家群や既存の体制が転覆した国家群だけでなく、支配体制側と反体制側とが武力衝突し、内戦状態へと陥る国家群が現れた。またシリアやイラクの一部で急激に支配勢力を拡大させた「イスラム国」を代表に、支配構造の安定化に窮する国家群の領域を超えて、新たな非国家勢力の台頭も見られた。こうして 2010 年代から中東地域の国家群の不安定化のなかで起こった紛争状態は、本研究計画が開始した当初だけでなく、研究計画が終了した 2022 年においても長期的に継続してきた。そして紛争が長期化してきた要因の一つは、紛争へのアメリカやロシアなどの超大国による参入だけでなく、他の中東諸国の介入が継続的に行われてきたことである。なかでも、中東の大国イランはシリアやイラクにおいて武器供与や軍事顧問の派遣に留まらず、直接正規軍の一翼を担うイスラーム革命防衛隊（以下・革命防衛隊と略記）および志願兵を投入するなど直接的な紛争介入を長期間にわたって行ってきた。それゆえ近年の中東地域の紛争をめぐって把握するには、紛争を長期化させてきたアクターの一つであるイランに関して、国家の内在的論理とともにそれを可能とさせる社会的メカニズムについて明らかにする必要があったことから、本研究計画に着手した。

２．研究の目的

東西冷戦構造の解体とグローバル化の拡大が始まった 1980 年代半ばから、戦争の形態は、それまで通常国家間で行われてきた形態から、国家と亜国家という異なる主体間の間で起きるいわゆる「新しい戦争」と呼ばれる紛争形態へとシフトしていった。それは民族、宗教など何らかの文化的同一性に基づく権力追及を目的とし、外部資金に依存しながらテロやゲリラ戦などの方法で展開してきた。特に中東地域では、「アルカイダ」や先述の「イスラム国」などグローバルに外部資金を獲得しながら展開する武装勢力と既存の国家との間の紛争が顕著である。

「新しい戦争」では、亜国家側は資金の限り目的達成のために紛争継続が可能である一方、国家側は紛争終結に到ったとしても賠償金もなく、紛争被害を埋め合わせる経済的方法のない非対称な紛争コスト負担を負う。当事者国家でさえも非対称なコスト負担を負わなければならないにも関わらず、中東ではアメリカや域内覇権国サウジアラビアなど大国だけでなく、中小国家が自国内のみならず周辺国の「新しい戦争」に長期的に介入する場合も少なくない。その代表が、先ほども述べたようにシリアやイラクへの直接的な紛争介入を行ってきたイランである。

これまでイランによる周辺国の紛争介入の理由については、国際関係論的研究や内政研究において示唆されてきた。たとえば国際関係論的研究においては、「新しい戦争」の当事者国家と中東の地域覇権を目指すイランとの相互の戦略的同盟関係に基づくことが示唆されてきた。つまり紛争コストに見合うだけの戦略的重要性を理由に、周辺国の紛争介入が行われたということである。他方、イランの内政研究では、近年革命防衛隊傘下のバスィージと呼ばれる民兵組織による市民生活の監視が進展してきたことが指摘され、軍国化と言論統制による紛争介入が示唆されてきた。しかしイランでは選挙制度とそれを通じて選ばれた行政府が一定の政治的役割を示してきたことに加えて、隣国イラクとの 1988 年までの約 8 年間にわたる戦争経験が、近年においてなおも退役軍人・戦没者遺族の支援、DNA 鑑定による遺体特定などを通じて社会的に共有されてきたことを鑑みれば、紛争介入を可能とさせる／紛争介入の否定を妨げる国内メカニズムについて明らかにする必要がある。そこで本研究では、当該メカニズムについてフィールドワークと文献を用いた実証的に明らかにしようとしてきた。

３．研究の方法

本研究は、民主的政治制度が一定の機能を果たしてきたことを鑑み、紛争介入を不可避とするような国内世論を形成する言説構造の存在を仮定し、その実態について殉教（shahādat）言説に着目し検討した。殉教はイスラーム一般で宗教的重要性があり、コソボやパレスチナなどの事例を鑑みても現代のムスリムによる政治闘争において重要な言説であることが知られてきた。しかしながらイランの宗教的多数派であるシーア派においては、正義のために立ち上がった歴代の指導者が不義の前に殉教を遂げたという宗教的世界観を形成するなど、より重要な宗教的意味がある。さらに 1979 年の革命後にシーア派の政治理論に基づいた国家が建設されたことで、殉教は新たに社会政治的に重要な意味を持つようになった。革命運動における死者、次いでイラン・イラク戦争の戦死者が殉教者（shahīd）として扱われ、概念的な拡大を通じて国民国家概念を強化する戦争と犠牲のレトリックとなった。そして戦死者を描いた壁画に焦点をあて都市空間における殉教者の視覚化／視覚的配置についての研究が行われてきたように、近年のイランにおいても殉教は重要な社会的意味をもち続けてきた。それゆえ殉教が紛争介入にかかる政治的言説とも何らかの関係をもつことが推測できる一方、どのように殉教概念が生活世界に埋め込まれ、またどのような概念的変遷／操作を経て周辺国の紛争と関係づけられ、政治言説として

紛争介入をめぐる合意形成を促してきたのかを検証する必要があった。そこで本研究で実証的なアプローチによってその実態を明らかにし、中東地域における周辺国の紛争介入を、ミクロな言説化作用として分析することで当該地域における紛争の長期化構造を明らかにした。

４．研究成果

平成 30 年度

フィールド調査と文献調査を基軸とした研究活動を実施するとともに、小規模な研究会において率先して報告を行った。具体的には、イランのテヘラン市の殉教者博物館（イラン・イラク戦争の戦没者を対象とした博物館）や共同墓地の殉教者区画で、博物館関係者や博物館を運営する財団関係者を対象に展示物の収集や展示の意図、さらには展示方法について聞き取り調査を行った。また共同墓地で殉教者区画に参る遺族や親類、さらには「参詣者」についての聞き取り調査を行った。他方、文献調査については、隣地調査時に収集したイラン・イラク戦争の回想録や殉教者の回想録の読解を進めた。さらにそれらの回想録がどのように消費されるのかという側面についても調査を進めた。また博物館の網羅的調査も含め、その都度実施している本研究に関連した研究活動について報告を行い、進めている研究内容について漸次ブラッシュアップを図るとともに、研究の方向性を再帰的に検討することができた。さらに本研究の対象が一連のイラン社会特有の事象である一方で、それらをイスラーム特有の言説、あるいは分派特有の言説として本質主義的な理解を図るのではなく、あくまで社会的な諸アクターの関係性のなかで言説として構築されてきたということを分析しているということを明らかにするために、一般向けの新書および研究者を志す可能性のある市民に向けた書籍の刊行を行った。

平成 31 年／令和元年度

前年度の研究成果発信を行うとともに、現地イランの地方部の殉教者博物館をも対象に踏まえた聞き取り調査を実施した。前者については、日本文化人類学会においては、イラン・イラク戦争の帰還志願兵による殉教者の取材活動について行ってきた調査に基づきながら、戦後のイランにおいて政治の場面で表出する情動と持続的支配構造との関係について研究報告を行った。また 2020 年年始にイランとアメリカとの緊張関係が急激に増すなかで表出した殉教言説を射程に入れた研究報告を所属機関内の研究集会で行った。また 12 月半ばから年末にかけて、これまでテヘラン市を中心に行ってきた調査を、ガズヴィーン州、エスファハーン州ならびにマーザンダラーン州に拡大し、各地の殉教者博物館を中心に施設の運営の実施状況や、地方部での特色について焦点をあてた聞き取り調査を実施した。その結果、首都テヘランでの聖地防衛博物館などの施設が軍を含めた体制内の各関係機関によって展示等が拡充され、地方の大都市部では聖地防衛博物館が同様に整備されてきたことが明らかになった。また地方の中規模都市では殉教者博物館の整備が進められてきたものの、展示等については収集した遺品等を並べているだけでなく、実質的には博物館施設としては機能していないことが明らかになった。

令和二年度

口頭発表を中心とする研究成果発信を継続的に行った一方で、新型コロナウイルス感染症拡大によりフィールド調査の実施に加え、図書館等の利用制限を背景とした研究の遅延が生じるなか研究計画の見直しを行った。成果発信については、日本中東学会年次大会において研究報告を行うとともに、イラン・イラク戦争勃発から 40 年、湾岸危機から 30 年を記念して行われたシンポジウムでイランの視点からコメントを行うことで、イラン以外の地域での戦争の記憶をめぐる継承と断絶との視座を養うことができた。さらに、イラン・イラク戦争の従軍兵士や戦没者に関する研究の過程で調査してきた、体制右派のイランの空手団体に関する肉体鍛錬と精神修養についての論考を英語でまとめた。他方、研究計画の見直しとして、本来 2020 年度を最終年度としていたところ、1 年間の延長措置をとるとともに、最終的な成果の取りまとめに加え、2000 年代以降の殉教者概念がイラン社会において自然化されてきた点について、芸術などに視野を広げる計画へと変更を行った。

令和三年度

本研究において実施してきたフィールド調査に基づく長期的な紛争介入の構造をめぐる殉教者言説と支配体制の一翼を担う革命防衛隊などの「軍」勢力の社会的支持基盤の解明を目的とした単著の刊行に加え、殉教者への追悼をめぐる儀礼のドキュメンタリー作品の批評集について若手研究者と共同で翻訳するなど研究成果の発信を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Kenji KURODA	４．巻 14
２．論文標題 Embodying Islamic Thought through Karate: A Reconsideration of Modern Sports and Indigenization in Iran	５．発行年 2021年
３．雑誌名 イスラーム世界研究	６．最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kenji KURODA	４．巻 50
２．論文標題 Finding ‘Ali as a Heroic Figure From Import of Knowledge on Islam to Customization in Modern Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Historical studies bayt AL hikma	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 現代イランにおける記憶の歴史化と忘却の政治―ある帰還志願兵を中心に
３．学会等名 第36回日本中東学会年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 コメント③「イラン政治の観点から」
３．学会等名 イラン・イラク戦争から40年・湾岸危機/湾岸戦争から30年・公開シンポジウム「変動する湾岸情勢と日本：危機の時代を前望する」
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 情動の政治と個人の変容―イランにおける帰還民兵の事例から
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 アメリカ‐イラン関係の現代的展開 ―立憲革命からトランプと知の「内方浸透」から考える
３．学会等名 パネルディスカッション「ポスト・オリエンタリズムから考えるイランと日本」
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 イスラーム思想の実践としての身体鍛錬ーイランの空手道場を事例に
３．学会等名 シンポジウム「現代イスラーム世界を眺望する：研究の最前線」
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 現代イランにおける40年の殉教物語―死の社会化と国家の「神話」形成
３．学会等名 第300回民博研究懇談会
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒田賢治
２．発表標題 追悼儀礼へのビジュアル・アプローチへの可能性 ：『フレイムのなかの事件』を手がかりに
３．学会等名 第38回日本中東学会年次大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計5件

１．著者名 椿原敦子、黒田賢治	４．発行年 2018年
２．出版社 星海社	５．総ページ数 208
３．書名 『サトコとナダ』から考えるイスラム入門　ムスリムの生活・文化・歴史	

１．著者名 小杉泰、黒田賢治、二ツ山達朗編	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 288
３．書名 大学生・社会人のためのイスラーム講座	

１．著者名 Kenji KURODA and Tetsuo NISHIO ed.,	４．発行年 2019年
２．出版社 Center for Modern Middle East Studies at the National Museam of Ethnology	５．総ページ数 Viii+326
３．書名 Research source guide for museums in the Middle East : Islamic republic of Iran	

１．著者名 黒田 賢治	４．発行年 2021年
２．出版社 世界思想社	５．総ページ数 254
３．書名 戦争の記憶と国家	

１．著者名 Kenji Kuroda and Kenichi Tani	４．発行年 2022年
２．出版社 Center for Modern Middle East Studies at the National Museum of Ethnology	５．総ページ数 iv+125
３．書名 "The Event in the Frame" by Ahmad Talebi-nejad : guide for Iranian documentaries on Ashura	

〔産業財産権〕

〔その他〕

A New Mode of Jihad and Martyrdom in Iran
http://en.ritsumei.ac.jp/research/aji/publication/essay/number06/
第6回　イラン流ジハードの流儀：コロナウイルスとの格闘
http://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/publication/essay/number06/
博物館検索データベース（イラン編）
https://www.minpaku-cmmes.com/iran.php

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関